

# 『経学歴史』における皮錫瑞の経学史観について

井 澤 耕 一

はじめに

いわゆる「経学史」とは儒教において最重視される著作、すなわち「経書」に関する學術活動の歴史であり、単に儒教の範疇にとどまらず、文学、宗教学、歴史学、文字学をも包括する広範囲なもので、中国の學術を知る上で必要不可欠といえよう。しかしそれほど重要でありながら、経学の歴史、変遷を知ることが容易なことではない。なぜならそれが広範囲にわたっているために、初学者は時として一艘の小舟のように歴史の波間を彷徨うことになってしまふからである。その困難な旅路の羅針盤となるのが、今回取り上げた『経学歴史』である。この書は初学者のための「教科書」として、日本、中国を問わず広く読まれ、特に中国で出された経学史に関する論考には多く引用されている。<sup>(1)</sup> それを著したのは清末の今文経学者、皮錫瑞（一八五〇—一九〇八）であり、これが巷間に流布したのは、一九二八年、周予同によって注釈本が出されて以降であった。<sup>(2)</sup>

このように多くの人に読まれてきた『経学歴史』であるが、その書の特徴について論じたものは意外に少ない。著

者の皮錫瑞については、戊戌変法や清末の湖南公羊学派に関する研究において取り上げられてはいるが、『経学歴史』に投射されている彼の経学思想については、従来あまり論じられてこなかった。<sup>(4)</sup> 筆者はここ十数年来、共同で『周予同注 経学歴史』の全訳に取り組んできた。<sup>(5)</sup> その成果をふまえ、本稿では、皮錫瑞の生涯とその著述活動を考証した上で、『経学歴史』における皮錫瑞の経学史観の一端を明らかにしていく。

## 第一章 皮錫瑞の生涯

皮錫瑞は、字を鹿門または鹿雲といい、前漢の伏生を崇拜していたことにより、師伏先生とも称されている。彼は道光三十年（一八五〇）十一月十四日、湖南長沙府善化县において、皮樹棠（一八三九—一八九）の長子として生まれた。父樹棠は「儒術を以て吏治を飾」り、浙江宣平知県にも任命された地方官僚であった（『皮鹿門先生錫瑞年譜』三—四頁、以下『年譜』）。皮錫瑞は十四歳で童子試を受け、県学の生員に補された。そして同治十二年（一八七三）二十四歳の時、拔貢に挙げられたが、翌年の廷部試に失敗し、その後三度郷試に落第している。光緒八年（一八八二）ようやく順天郷試に合格したが、以後礼部試（会試）に及第することは無かった。彼は本来文学を愛好していたが、このような不遇な時を過ごす中で、経学に潜心するようになり、<sup>(6)</sup> 光緒十三年（一八八七）、三十八歳の時、処女作である『尚書大伝箋』を著して、今文経学者としての道を歩み始めた。

光緒十六年（一八九〇）、湖南桂陽州の龍潭書院主講となり、二年後江西南昌の経訓書院に移った。当時、湖南・江西地方は性理の学を偏重し、禅宗に傾倒する者さえもいた。しかし皮錫瑞は「西京（前漢）の微言大義の学を申明し、人に教うるに経学は当に家法を守るべく、詞章は必ず家数（一派）を宗と」したために、当地の俊才がその門下

に集まり、その前後七年間で湖南・江西地方の学風は大いに転換したと伝えられている（『年譜』二四頁）<sup>(7)</sup>。

光緒十九年（一八九三）九月、書誌学者の葉德輝（一八六四—一九二七）が皮錫瑞を長沙に訪れた。葉德輝は王先謙（一八四二—一九一七）とともに保守派の大物として知られており、今文経学者の皮錫瑞とは、敵対関係にあっても不思議ではないが、両者の交流は後々まで続いている。翌年の四月には今文経学の雄である康有為（一八五八—一九二七）の『新学偽经考』を入手し、古文経学を斥けたことについては評価しつつも、『周礼』が劉歆の作であり、『史記』も劉歆によってひそかに改竄されたとする主張に対しては、「武断なること太だ過ちなり」と批判している（『年譜』二七頁）<sup>(8)</sup>。以上二つのエピソードから、皮錫瑞には自己と相違する意見を持っていてる者でも受け入れる学問的度量があり、また牽強付会的な武断を嫌ったということが看取できる。さらにいえば、この学問的態度が『経学歴史』の記述に影響を与えていることは想像に難くない。

光緒二十一年（一八九五）、日清戦争が清朝側の敗北に終わると、湖南省では朝野を問わず革新の機運が高まり、二十三年（一八九七）教育機関として湖南時務学堂が設立された。翌二十四年（一八九八）には実質議院としての地位を有することを目指した南学会が発足し、時を同じくして日刊紙『湘報』が創刊された<sup>(9)</sup>。皮錫瑞は、学長として招聘され、「學術」主講に就任し、二月一日の開講日、官・紳・士・民三百余名が集まる中で、学会設立の宗旨を述べたのである<sup>(10)</sup>。以後講義は三ヶ月、計十二回に及んだが、その内容は政治、歴史、思想と多岐にわたっていた。思想方面では、「論变法為天地之氣運使然」（第十一次講義）、「論孔子創教有改制之事」（第八次講義）など、变法や孔教に関する論のほか、「統論講学」（第二次講義）、「論朱陸異同歸於分別義理」（第三次講義）、「論学者不可詬病道学」（第四次講義）では漢学と宋学を貫通し、中学と西学を融合させることを主張している<sup>(11)</sup>。

この一連の革新運動に対して、保守派は「言を肆にして詆毀」し、葉德輝も皮錫瑞に書簡を送って、康有為を痛罵するとともに、「本意他無くして公の去るを欲するに過ぎざるのみ」と南学会辞任を迫っている。<sup>(12)</sup>皮錫瑞はそれに反論しているが、結局四月二十日経訓書院の主講として江西に戻っている。その理由については、皮氏が保守派の攻撃に耐えられなくなったためとする説が主流であるが、<sup>(13)</sup>吳仰湘氏は、『師伏堂日記』を仔細に再検討して、皮錫瑞は葉德輝の攻撃に全力で反論したとし、さらに彼が江西に赴いたのは、既定事項であって、決して保守派に屈服したためではないという見解を示している。<sup>(14)</sup>

その年の八月、戊戌変法運動が失敗し、戊戌六君子（譚嗣同、楊銳、劉光第、林旭、楊深秀、康広仁）が北京で刑死したが、<sup>(15)</sup>湖南にも変法派弾圧の波が押し寄せ、二十一日には南学会を廃止し、その学約を焼却せよという上諭が出された（『清徳宗実録』巻四二八）。そして皮錫瑞も康、梁に「心悦誠服」したという弾奏により、翌年の二月挙人の功名を剥奪され、地方官によって拘束されたのであった。皮錫瑞は『日記』に「康梁の学は、余と亦た多く同じからず、何を以て其の心悦誠服たるを見んや。真に「莫須有」<sup>ありえない</sup>三字の獄なり、何を以て天下に服せんや」と記して、<sup>(16)</sup>冤罪であると主張しているが（『年譜』六八頁）、これ以降門を閉ざして著述活動に専念し、三年後ようやく許されたのであった。

光緒二十八年（一九〇二）四月、皮錫瑞は、県令に招聘されて善化小学堂を創設し、公職に復帰した。翌年、湖南省に高等学堂及び師範館が設立されると、倫理経史講席に任命され、高等学堂監督をも兼任し、その後は北京からの招聘を辞退して、湖南に留まって研究、教育に励み、湖南高等、師範館、中路師範、長沙府中学堂の講席、学務公所図書課長及び長沙定王台図書館纂修を歴任している。そして、光緒三十四年（一九〇八）二月四日、善化県の自宅に

において、五十九年の生涯を閉じたのであった。

## 第二章 皮錫瑞の著述活動

本章では、皮氏の生涯における著述活動を明らかにしていくが、彼の著述書目は『年譜』四〇九頁において既に一覽されている。ただしそれは民国期に作られたもので、誤りや補足すべき点が多々見られる。そこで筆者は他史料、目録などを参考にして新たなデータを補足し、書目を刊行年順に並び替えて、彼の学者としての事績が一目で理解できるようにした。それを通覧してみると、皮氏の著述活動は、戊戌政変に巻き込まれて「杜門」した光緒二十五年及び、公職に復帰した二十八年以降が盛んであり、とりわけ『経学歴史』及び『経学通論』は晩年の書として、彼の経学の集大成であったことが了解できる。

一、『師伏堂叢書』善化皮氏師伏堂輯印、計十八種。

- ①『尚書大伝疏証』七卷。光緒十三年（一八八七）初稿、最初は『尚書大伝箋』という書名であったが、二十一年（一八九五）に『尚書大伝疏証』に改められた。翌年、善化師伏堂自刊、『続修四庫全書』第五十五冊所収。
- ②『経訓書院自課文』三卷。光緒十九年（一八九三）及び二十一年、善化師伏堂自刊。
- ③『孝経鄭注疏』二卷。光緒二十一年、善化師伏堂自刊、『四部備要』経部所収。
- ④『師伏堂駢文』二種六卷。光緒二十一年、二巻のみ刊行。光緒三十年（一九〇四）、三十余篇を補充して、駢文四巻を補刊、『続修四庫全書』第千五百六十七冊所収。

- ⑤ 『古文尚書冤詞平議』二卷。光緒二十二年（一八九六）、湖南思賢書局刊、『四庫未収書輯刊』第四輯第三冊所収。
- ⑥ 『今文尚書考証』三十卷。光緒二十三年（一八九七）、善化師伏堂自刊、『統修四庫全書』第五十一冊所収。一九八九年、『十三經清人注疏』の一冊として中華書局から標点本が出版されている。
- ⑦ 『聖証論補評』二卷。光緒二十五年（一八九九）、善化師伏堂自刊。
- ⑧ 『尚書中候疏証』一卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊、『統修四庫全書』第五十五冊所収。
- ⑨ 『鄭志疏証』八卷。附『鄭記考証』一卷、『答臨孝存周礼難疏証』一卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊、世界書局『讀書劄記叢刊第二集』第二冊、『統修四庫全書』第七十一冊所収。
- ⑩ 『六芸論疏証』一卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊。
- ⑪ 『魯礼禘祫義疏証』一卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊、『統修四庫全書』第一百十二冊所収。
- ⑫ 『漢碑引經考』六卷。附『漢碑引緯考』一卷。光緒三十年、善化師伏堂自刊、馬小梅主編『国学集要初編』第二種（文海出版社、一九六七年）所収。
- ⑬ 『師伏堂詠史』一卷。光緒三十年、善化師伏堂自刊。
- ⑭ 『師伏堂詞』一卷。光緒三十年、善化師伏堂自刊。
- ⑮ 『師伏堂詩草』六卷。光緒三十年、善化師伏堂自刊、『統修四庫全書』第一千五百六十七冊所収。
- ⑯ 『經学歴史』一卷。光緒三十二年（一九〇六）、湖南思賢書局刊、『統修四庫全書』百七十九冊所収。他に商務印書館影印本（一九二三年）、周予同注釈本がある。注釈本は一九二八年、学生国学叢書の一冊として商務印書館から出版されて以降、一九二九年、一九五九年（中華書局）に修訂版が出されている。

⑬『經学通論』五卷。光緒三十三年（一九〇七）、湖南思賢書局刊、『統修四庫全書』百八十冊所収。また、商務印書館排印本があり、万有文庫及び国学基本叢書に収められている。一九五四年からは中華書局より重版されている。

⑭『王制箋』一卷。光緒三十四年（一九〇八）、湖南思賢書局刊。二〇〇五年、王錦民校箋『王制箋』校箋』（華夏出版社）が出版されている。

二、叢書以外の既刊書

- ① 浙江『宣平県志』二十卷。光緒四年（一八七八）刊本。皮樹棠修、皮錫瑞纂。
- ② 『九經淺説』。光緒二十年（一八九四）、經書に関する著作七種を収録している。内容は、『左伝』二卷、『公羊』一卷、『穀梁』一卷、『礼記』二卷、『尚書』二卷、『詩』二卷、『四書』若干卷。光緒二十五年、湖南思賢書局は、『礼記淺説』及び『左伝淺説』の二種のみを刊刻した。それぞれ『四庫未収書輯刊』第四輯第五冊、第八輯第二冊所収。
- ③ 『尚書古文疏証弁正』一卷。光緒二十二年、湖南思賢書局刊。光緒二十三年思賢講舎刻本が『統修四庫全書』第五十一冊に収められている。
- ④ 『尚書古文考実』一卷。光緒二十二年、湖南思賢書局刊。
- ⑤ 『南学会講義』一卷。光緒二十四年（一八九八）『湘報』第二号、第七十九号所載。『湘報類纂』乙集下にも所収。
- ⑥ 『駁五經異義疏証』十卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊。甲戌（一九三四年）河間李氏重刻本が『国学集要初編』第一種、『統修四庫全書』第百七十一冊に収められている。
- ⑦ 『墨守、箴膏肓、积廢疾疏証』、各一卷。光緒二十五年、湖南思賢書局刊。

⑧『蒙学歌訣』二卷。文藪主人撰と題されている。光緒二十八年（一九〇二）、善化小学堂の啓蒙用教科書。翌年、長沙湘雅堂が刊行。

⑨『師伏堂筆記』三卷。原名『統鹿門家鈔』。光緒三十三年（一九〇七）、善化師伏堂刊。民国十九年（一九三〇）長沙楊樹達積微居刻本が、『統修四庫全書』第千六百六十五冊に収められている。

⑩『師伏堂春秋講義』二卷。宣統元年（一九〇九）排印本、次子の皮嘉祐編。

### 三、未刊本及び散佚本

①『史記引書考』六卷。光緒二十年—二十一年の作。

②『西漢詠史』一卷。光緒二十五年の作。

③『史記補注』不分卷。光緒二十五年の作。

④『焦氏易林疏証』一卷。光緒二十六年（一九〇〇）の作。

⑤『讀通鑑論史評』一卷。光緒二十六年の作。

⑥『広皮子世録』。光緒二十六年、前年編集の『皮氏先賢録』を改め、『広皮子世録』と名付けたが未刊。

⑦『長蘆塩法志』。光緒二十九年（一九〇三）に例言十三条が完成し、さらに志六則を作成しようとしたが、未完。

⑧『師伏堂日記』。光緒十八年（一八九二）正月一日より光緒三十四年（一九〇八）二月四日まで、計十六年間の日記。その一部は湖南社会科学歴史研究所に保存されており、『湖南歴史資料』一九五八年第四期、一九五九年第一期、第二期、一九八一年第二期において公開された。また湖北省図書館には手稿本三十五冊が蔵されている（注

記。その一部は湖南社会科学歴史研究所に保存されており、『湖南歴史資料』一九五八年第四期、一九五九年第一期、第二期、一九八一年第二期において公開された。また湖北省図書館には手稿本三十五冊が蔵されている（注



(3) 所掲呉論考、二頁参照。

### 第三章 『経学歴史』における皮錫瑞の経学史観

前章で述べたように、『経学歴史』はその姉妹書といふべき『経学通論』と共に、皮錫瑞晩年の書である。『経学通論』が易、書、詩、三礼、春秋についての議論をまとめているのに対して、『経学歴史』は春秋から清朝までの経学史を記した著作であり、その細目は、次のとおりである。

- 一 経学開闢時代 春秋 孔子の六経刪定について
- 二 経学流伝時代 戦国 孔子門下の経書の伝授について
- 三 経学昌明時代 前漢 経学博士が立てられ儒教が国教化
- 四 経学極盛時代 前漢〜後漢 儒教独尊体制の確立
- 五 経学中衰時代 三国〜西晋 王肅の出現により今文経学が衰退
- 六 経学分立時代 南北朝 経学の南北分裂
- 七 経学統一時代 隋・唐 南学による経学統一
- 八 経学変古時代 宋 疑経の時代
- 九 経学積衰時代 元・明 義理学の盛行による経学の衰退
- 十 経学復盛時代 清 漢学の復興

『経学歴史』最大の特徴として挙げられるのは、これが「今文経学」の立場から記述されていることである。今文

とは、漢代に流行した隸書で書かれた経書であるが（「経学昌明時代」第七節）、それを信奉する学者は、孔子を受命の素王として神聖化し、『詩』『書』『礼』『楽』『易』『春秋』の六経を孔子の作と主張した。それに対して戦国時代以前の書体、籀書で書かれた経書（「経学昌明時代」第七節）を信奉する「古文経学」者は、周公を祖として、孔子は「述べて作らず」、つまり祖述者にすぎなかったと主張したのである。皮錫瑞は、

孔子以前、経有るを得ず。猶お之れ李耳既に出でて、始めて五千の言を著し、釈迦未だ生まれずして、七仏の論を伝えざるがときなり。<sup>(17)</sup>（「経学開闢時代」第一節）

とした上で、孔子が六経を刪定したのは、万世にその教えを伝えるためであったと述べ、孔子を「万世の師表」、六経を「万世の教科書」としている（「経学開闢時代」第二節）。しかし結果的に、孔子の教えが「闇忽不章」となってしまうのは、特に古文経学者などが、孔子の本意を理解せずに、「其の学を實行して以て世を治め」ようとしなかったためであると批判し、「経を以て孔子の作と為」し、「孔子経を作りて以て万世の旨を教」えることが肝要だと主張した（同右）。皮錫瑞はこの観点に基いて、五経博士が立てられ、今文経学のみ尊崇された武帝の時代が「最も純正」であり（「経学昌明時代」第一節）、経学が国家的に尊崇され、表面上その勢力が「極盛」であった後漢でさえも超えられなかったと述べている（「経学極盛時代」第十三節）。

さて今文経学説に拠って著述された『経学歴史』だが、同時に、皮錫瑞が執筆の際、「学は宜しく通達すべく、宜しく狹隘すべからず」（南学会第二次講義中の言）を旨としたことも看過してはならない。彼は第二次講義において、「門戸の見」つまり派閥主義（セクト主義）を幾度となく批判している。

今の学ぶ者に、漢学有り、宋学有り。漢学を講ずる者に、西漢今文の学有り、東漢古文の学有り。宋学を講ずる

者に、程朱の学有り、陸王の学有り。近日又た専ら中学を講ずる者を以て旧学と為し、西学を兼ね講ずる者もて新学と為す。学ぶ者は共に党して異を伐ち、総べて以らく、学、自己は是、人家は是ならずと。平心にして論ずれば、漢学は未だ嘗て義理を講ぜずんばならず、宋学は未だ嘗て訓詁を講ぜずんばならず、同に是れ孔子を師法とし、何ぞ必ずしも室に入りて、戈を操らん。西学は中学より出で、周秦諸子の遺に本づくは、荘、列、関尹の諸書の載する所にして、是れ其の明証なり。(中略)之を総ぶれば、無論何れの項の學術も、皆な当に自ら心得を求むべく、当に己を是とし、人を非とすべからず、意に同じからざること有らば、周く咨り博く訪ね、互相に印証し、以て一是に折衷するを妨げず。即ち学派の宗旨は強いて合わすべからず、儘く各おの聞く所を尊び、各おの知る所を行い、異同有るを妨げず、必ずしも門戸を争わず。無論何れの項の學術も、虚名に務むるを要せずして、実用に切するを要とす。(以下略)<sup>(18)</sup>

彼は「解経は当に事を實にして是を求むべくして、同に党して真を妬むべからず」(『今文尚書考証』凡例中の言)、つまり事實に基づいて考証していくことを重んじて、学派に固執することを厳しく戒めており、この思想は『経学歴史』の記述にも如実に反映されている。

例えば、「経学復盛時代」第四節で彼は、漢学の泰斗が宋学を軽視しなかったことを評価して次のように述べている。

宋儒の経説は古義に合わずと雖も、宋儒の学行は古人に愧じず。且つ其の析理の精は、多く独得の処有り。故に、惠(周惕、士奇、棟)、江(永)、戴(震)、段(玉裁)は漢学の幟志を為すも、皆な敢えて宋儒を將て抹撥せず。学は心得を求め、門戸を争う勿れ。若し門戸を分たば、必ず詬争起こらん。<sup>(19)</sup>(以下略)

皮錫瑞は元々、宋代を「宋儒は伝注を撥棄し、遂に疑經に難からず」（「經学変古時代」第一節）が横行した「變古」、つまり古義を変えた時代と定義した上で、「經学積衰時代」に至る道筋をつけたと批判していた。<sup>(20)</sup>とはいえ、彼はその宋代の經学に対しても、「門戸の見」から脱して、公平、冷静な検討を行い、特長を見出すことに務めたのである。それを踏まえて、漢学派一辺倒の江藩（一七六一—一八三〇）『国朝漢学師承記』を「門戸の見を脱せずして、未だ小疵を免れず」と批判し、漢学を攻撃した方東樹（一七七一—一八五二）『漢学商兌』に対しても「純ら私意を以て其の謾罵を肆にす」、「名は宋を揚げ漢を抑うと為すも、実は則ち心を禅学に帰す」と酷評したのである（「經学復盛時代」第四節）。

また「經学復盛時代」第七節で、「学の簡明なる者は有用にして、繁雜なる者は無用なり」と述べた後、読むべき經書を推奨しているが、それでも広範にわたった選択を行っている。例えば『詩』を読む際は、三家詩を主として、『毛伝』、『鄭箋』も参照するよう述べており、『春秋』については『公羊伝』は無論、『左氏伝』も挙げ、賈逵、服虔の説を主として、杜預注も参照するように述べている。もし彼が今文經学の立場に固執していたならば、決して古文經学系統の注を挙げるはずはなく、ましてや『左伝』に言及することもなかったであろう。以上のように皮錫瑞は、まさしく「学は宜しく狹隘すべからず」を旨として、經学を後生に伝えようとしていたのであった。

この姿勢は他の時代においても変わらず、例えば北宋の王安石（一〇二一—一八六）は、『書』『詩』『周礼』の新解積書である『三經新義』を作成しているが、それに対する清人の評価は、『四庫全書総目提要』經部礼類一「經義に付会して以て儒者の口を拊む。実は真に『周礼』を信じて之を行ふべしと為すに非ず」、「国朝漢学師承記」卷一自序「宋初は唐の弊を承けて、邪説詭言、經を乱し聖を非ること、殆ど焉より甚だしき有り。歐陽脩の詩、孫明復（復）

の春秋、王安石の新義の如きは、是れのみ」など批判的なものが殆どであった。『経学歴史』を通覧してみると、皮錫瑞の王安石評価はそれとは違い、できるだけ冷静に評しようとする姿勢が見て取れる。例えば、疑經の氣風は王安石だけでなく、慶曆以降「其の時の氣風実<sup>に</sup>然り」であったことを指摘し（『経学変古時代』第一節）、また王安石が『春秋』を断爛朝報（切れ切れの官報）として学官に立てなかつたという批判に対しても、「特に<sup>た</sup>安石のみ是の言有るに非ずして、専ら左氏を執りて『春秋』を為むる者皆な此の意有るを免がれず」（『経学変古時代』第五節）として、王安石を特に批判することを避けている。これもやはり「門戸の見」から脱却し「実事求是」を目指した彼の経学思想の表れといえるだろう。

ただし、暗記を主とする帖經を廃止し、論述試験を導入した王安石の科挙改革に対して、皮錫瑞はそれが結果的に経学の衰退を招いたと批判している（『経学積衰時代』第二節）。

科挙取士の文、而し經義を用いれば、則ち必ず務めて新異を求め、以て試官を歎動す。科挙經義の法を用いて説經の書を成さば、則ち必ず創りて新奇を為し、以て後学を煽惑す。經学は宜しく古を述ぶべくして、宜しく新を標すべからず。經学の文字を以て人を取らば、人必ず新を標して以て古と別異す。一代の風氣は一時の好尚に成る、故に法を立つるに慎まざるべからざるなり。<sup>(22)</sup>

つまり、科挙に經典解釈を導入すれば、受験者は必ず奇拔さを追求して、争って新説を打ちたてようとする、それは古えから継承されてきた經典解釈を捻じ曲げてしまうことを意味し、皮錫瑞にとって決して是認できることではなかつたのである。

それでは、皮錫瑞は自らが生きた清朝の経学史をどのように見ていたのだろうか。彼は「経学復盛時代」第七節に

おいてこう述べている。

国朝の経学は凡そ三変す。国初、漢学方に萌芽し、皆な宋学を以て根柢と為し、門戸を分かつたずして、各おの長ずる所を取る、是れ漢宋兼采の学たり。乾隆以後、許(慎)、鄭(玄)の学大いに明らかかり、宋学を治める者已に尠<sup>すく</sup>なし。経を説くに皆な実証を主とし、空しく義理を談ぜず、是れ専門の漢学たり。嘉(慶)、道(光)以後、(中略)漢十四博士の今文説、魏晋より淪亡すること千余年、今日に至りて復た明らかかり。実に能く伏(生)、董(仲舒)の遺文を述べ、(前漢)武(帝)、宣(帝)の絶軌を尋ぬ、是れ西漢今文の学たり。学愈いよ進めば愈いよ古えたり、義愈いよ推せば愈いよ高し。屢しば遷りて其の初に返り、一変して道に至る。<sup>(23)</sup>(以下略)

皮氏の分析によると、清朝初期は、漢学と宋学の長所を兼ね備えた漢宋学折衷派が主流となった。乾隆期になると、後漢の許慎、鄭玄の学が明らかとなり、いわゆる考証学の時代に入った。そして嘉慶、道光以降は、魏晋以後久しく絶えていた前漢今文学が復活し、経学は「一変して道に至」ったのである。ただし皮錫瑞は、同第八節で、今文経学が「近ごろ始めて發明」されたばかりだと指摘した上で、「猶お後人の推闡する者を待つこと有り」と次世代の奮起を促しているが、これは、彼が今文経学は未だ往時の勢力を回復していないと考えていたためであろう。

以上、『経学歴史』における皮錫瑞の経学史観を検討してきたが、結論として、彼はあくまでも今文経学の立場から経学史を論じてはいるが、それに倣して、他説を排除することがないよう慎重に考証、分析を行っていたことが明らかとなった。これは『経学歴史』が通史である以上、その姿勢を採らざるをえなかったかもしれないが、彼の学問に対する優れた平衡感覚が、この書を現在にいたるまで斯界に存在たらしめた理由になったともいえるだろう。

## おわりに

最後になぜ皮錫瑞が晩年に『經学歴史』、『經学通論』を著したのかを考察してみる。彼が晩年湖南で教育行政に携わっていた際、最も腐心したのは、教科書の問題であった。彼は死去の前年、「応詔陳言、謹擬增訂学堂章程六条摺」を起草して、次のように述べている（『年譜』一〇一〜一〇二頁）。

孔子五經を刪定し、漢より以来孔子を尊奉して万世の師表と為さざるなし。五經は即ち万世の教科書たり。（中略）但だ人人をして皆な聖經を以て口耳に熟らしむれば、則ち人人皆な聖教の其の心胸に在るを有す。近日邪説流行し、乃ち謂えらく、中国富強を図らんと欲すれば、止だ応に専ら西学を用うべくのみにして、五經四書は皆な当に之を一炬に付くべし（焼却しなければならぬ）と。学堂を弁ずる者は、其の説に惑い、敢えて聖教を輕蔑す。民の学堂を立つるは、多く經学の一門無し。即い官立なるも、亦た略ぼ餽羊の遺（形ばかりの遺物）を存するに過ぎず。<sup>(24)</sup>（以下略）

ここで彼は、学堂などの教育機関で經学の伝授が殆どなされていないことに警鐘を鳴らしているのだが、仮に「廢經」という事態に至れば、それは「即ち是れ廢孔」を意味し（同右）、その「悖謬は千古の未だ有らざる所」（同右）となってしまう。その危機的状況に陥ることを防ぐため、皮錫瑞は『經学歴史』及び『經学通論』を著し、經学の正しいありようを後生に伝えようとしたのではないだろうか。その彼の思いは、「經学復盛時代」第七節の「能く其の源流を考え、塗徑に迷わず、漢人の治經の法に本づき、漢人致用の方を求むれば、（中略）両漢人才の盛んなるは必ず復た今日に見わるる者有り、何ぞ聖經を疑いて無用と為し、孔教を以て廢すべしと為すに至らんや」という言説に如実<sup>(25)</sup>

に反映されているといっても間違いないであろう。

注

- (1) 例えば、孫欽善『中国古文献学史』（中華書局、一九九四年）、朱維錚編『周予同經学史論著選集（増訂本）』（上海人民出版社、一九九六年）、吳雁南主編『中国經学史』（五南圖書出版公司、二〇〇五年）など。
- (2) 周予同注『經学歴史』は一九二八年、「学生国学叢書」の一冊として商務印書館から出版されたのが最初である。本稿作成に際しては、中華書局一九八九年版を使用した。ちなみに韓国では、一九九五年、『中国經学史』（李鴻鎮訳、蜚雪出版社）として周予同注を含めた全訳が出版されている。
- (3) 皮錫瑞の伝記については、徐世昌『清儒学案』卷百九十三「鹿門学案」、周予同「皮錫瑞『經学歴史』序言」（一九二八年作、注（1）所掲『選集』にも所収、井澤耕一・橋本昭典共訳「周予同注 皮錫瑞『經学歴史』全訳（二十三）」（『千里山文学論集』七六、二〇〇六年）に全訳あり）、皮名振編『皮鹿門先生錫瑞年譜』（商務印書館、一九三九年）、「皮錫瑞」（湯志鈞『戊戌変法人物伝稿（増訂本）』上冊、中華書局、一九八二年）、楊向奎『清儒学案新編』第四卷（齊魯書社、一九九四年）、「皮錫瑞『鹿門学案』」、吳仰湘『通經致用一代師——皮錫瑞生平的思想研究』（岳麓書社、二〇〇二年）、同上「皮錫瑞の生平と學術」（彭林主編『清代學術講論』広西師範大学出版社、二〇〇五年）などを参照。彼の經学思想については、濱久雄『公羊学の成立とその展開』（国書刊行会、一九九二年）第十一章「清末湖南における公羊学（その二）——皮錫瑞の学問と思想——」、田漢雲『中国近代經学史』（三秦出版社、一九九六年）第六章第二節「皮錫瑞——正統今文学的殿軍」、丁亜傑『清末民初公羊学研究——皮錫瑞、廖平、康有為』（万卷楼圖書有限公司、二〇〇二年）、王継平『晚清湖南學術思想史稿』（湖南人民出版社、二〇〇四年）第五章第四節「皮錫瑞的學術思想」、吳仰湘「皮錫瑞的經学観——基於『師伏堂日記』的觀察」（朱漢民主編『清代湘学研究』湖南大学出版社、二〇〇五年）などを参照。特に吳仰湘氏の著述は、湖北省図書館蔵の『師伏堂日記』を仔細に検証した上で通説の誤りを多数正しており、筆者も大いに参考にした。
- (4) 前注所掲周論文、田論考、王論考など。周論文は、『經学歴史』を分析するというより、批判することに重点を置いているが、その妥当性について、筆者は大いに疑問を持つ。



(5) 井澤耕一・橋本昭典共訳「周予同注 皮錫瑞『經學歴史』全訳」(『千里山文学論集』四八、七六、一九九二—二〇〇六)、今夏汲古書院より単行本として出版される予定である。

(6) 『年譜』は『師伏堂日記』光緒十八年七月一日の「觀臨海金誠齋(鶚)『求古録礼説』。是書予己卯歲始治經時、得於浙江、喜其断制精確」に拠って、皮錫瑞が經學を研究し始めたのは、己卯つまり光緒五年(一八七九)三十歳の時と断定している。しかし吳仰湘氏は『日記』原本に「己卯歲」が無いことを発見し、さらに皮錫瑞は廷部試に落第した二十五歳にはすでに經學に傾倒していたと推測している(注(3)所掲吳論考、四六頁)。

(7) 江右故宗宋學、偏重性理、或流禪積。(中略)申明西京微言大義之學、教人以經學当守家法、詞章必宗家數。一時高才雋才、咸集其門、風氣為之不變。

(8) 康有為の弟子である梁啓超(一八七三—一九二九)も『清代學術概論』(一九二一年)第二十三節において、「(新學)偽經考」之著、二人者(梁啓超・陳千秋)多所參與、亦時時病其師之武断、然卒莫能奪也。(中略)有為以好博好異之故、往往不惜抹殺證據或曲解證據、以犯科學家之大忌、此其所短也」と康有為が客觀的事實を抹殺、曲解したことを批判している。

(9) この段落の記述は、小野川秀美『清末政治思想研究』(みすず書房、一九六九年)第五章「戊戌變法と湖南省」、湯志鈞『戊戌變法史』(人民出版社、一九八四年)第四章「湖南的維新運動」、深澤秀男『戊戌變法運動史の研究』(國書刊行會、二〇〇〇年)第二章、第四章を主に参照した。

(10) 第一次講義は、『湘報』第二号(光緒二十四年二月二十六日)所収。

(11) 第十一次講義は、『湘報』第七十二号(光緒二十四年四月九日)、第八次講義は、『湘報』第三十五号(三月二十五日)、第二次講義は、『湘報』第六号(二月二十日)、第三次講義は、『湘報』第十三号(二月二十九日)、第四次講義は、『湘報』二十一号(三月九日)所収。なお講義名は『湘報』には見えず、唐才常等撰『湘報類纂』(一九〇二)乙集下の題目を記した。

(12) 葉德輝『翼教叢編』卷六「葉吏部答皮鹿門書」。

(13) 注(9)所掲小野川論考、二一九頁、王爾敏「南學會」(『晚清政治思想史論』台灣商務印書館、一九九五年)一二三頁など。

(14) 注(3)所掲呉論考、第四章第三節「皮、葉之争和南学会「停講」考弁」参照。

(15) 戊戌変法運動の経緯については、注(9)所掲湯論考、坂出祥伸『康有為 ユートピアの開花』(集英社、一九八五年)参照。

(16) 康梁之学、与余亦多不同、何以見其心悦誠服、真莫須有三字獄、何以服天下耶。

(17) 孔子以前、不得有経。猶之季耳既出、始著五千之言、釈迦未生、不伝七仏之論也。

(18) 今之学者、有漢学、有宋学。講漢学者、有西漢今文之学、有東漢古文之学。講宋学者、有程朱之学、有陸王之学。近日又以專講中学者為旧学、兼講西学者為新学。学者党同伐異、総以学自己是、人家不是。平心而論、漢学未嘗不講義理、宋学未嘗不講訓詁。同是師法孔子、何必入室操戈。西学出於中学、本周、秦諸子之遺、莊、列、関尹諸書所載、是其明証。(中略) 總之、無論何項學術、皆当自求心得、不当是己非人、意有不同、不妨周咨博訪、互相印証、以折衷於一是。即学派宗旨不可強合、儘可各尊所聞、各行所知、不妨有異同、不必争門戸。無論何項學術、不要務虚名、要切实用。

(19) 宋儒之経説雖不合於古義、而宋儒之学行不愧於古人。且其析理之精、多有独得之处。故惠、江、戴、段為漢学幟志、皆不敢將宋儒抹殺。学求心得、勿争門戸。若分門戸、必起詬争。

(20) 「経学変古時代」第七節では、宋人の改経の例を挙げた後、「宋、元、明人説経之書、若此者多、而実宋人為之俑始」と述べている。

(21) 若以春秋為断爛朝報、則非特安石有是言、專執左氏為春秋者皆不免有此意。

(22) 科挙取士之文而用経義、則必務求新異、以歆動試官。用科挙経義之法而成説経之書、則必創為新奇、以煽惑後学。経学宜述古而不宜標新。以経学文字取人、人必標新以別異於古。一代之風氣成於一時之好尚、故立法不可不慎也。

(23) 国朝経学凡三変。国初、漢学方萌芽、皆以宋学為根柢、不分門戸、各取所長、是為漢宋兼采之学。乾隆以後、許、鄭之学大明、治宋学者已尠。説経皆主実証、不空談義理、是為專門漢学。嘉、道以後、(中略) 漢十四博士今文説、自魏晋淪亡千余年、至今日而復明。実能述伏、董之遺文、尋武、宣之絶軌、是為西漢今文之学。学愈進而愈古、義愈推而愈高。屡遷返其初、一変而至道。

(24) 孔子刪定五経、自漢以來、莫不尊奉孔子為万世師表。五経即万世教科書。(中略) 但使人人皆以聖經熟於口耳、則人人皆有聖教在其心胸。近日邪説流行、乃謂中国欲富強、止応專用西学、五経四書皆当付之一炬。弁学堂者、惑於其説、

敢於輕蔑聖教。民立學堂，多無經學一門。即官立者，亦不過略存餽羊之遺。

(25) 能考其源流而不迷於塗徑、本漢人治經之法、求漢人致用之方、(中略) 兩漢人才之盛必有復見於今日者、何至疑聖經為無用而以孔教為可廢哉。